

いなほ

第118号

2021年11月20日

NPO 法人 萌

代表 渡多江文哉

横浜市戸塚区深谷町 893-2

B型事業所 工房いなほ

相談支援事業所 ふかや

グループホーム 独歩

TEL 045-443-7416

URL <http://www.mo-e.jp>

想いの継承

中国の古典の中で、「創業と守成どちらが難しいか」という問答がある。事業の創業と維持していくことについて、唐の太祖とのやり取りの際の問答である。側近者らは創業の難しさと答える一方で、守成の難しさと答える者があった。この問答は国についた問答であるが、このことは経営にも当てはまる内容であるように思われる。

私は2019年10月に事業を引き継いだ。当初は事業を引き継ぐのを躊躇い続けて来たが、萌の事業存続を考えれば引き継がざるを得なかった。その様な想いで引き継いだこともあり、萌に対しても前理事長が創業した会社という意識が強く、どこか他所の会社のような感じもしていた。その中でも新規事業として運送事業を準備する等役割と想いが矛盾した2年間だった。

その様な中で、前理事長や顧問から勧められたこともあり、私は9月から約3ヶ月間神奈川県中小企業同友会経営指針作成部会を受講した。11月16日には経営指針の発表会を行った。冒頭部分の問答は経営指針作成部会に参加している際に、自らを振り返りながら、頭に残っていた本の一部である。

今回の作成部会で経営理念を一から作り替える事に対して、自分が作れるのかという思いと、作り替えて良いのか等様々想いが交差した。右往左往している内に、終盤に差し掛かった頃に、経営理念の重要性が体に染み渡り、前理事長や顧問の言葉が腑に落ちた時があった。事業を存続していくには、自らも会社を作っていくということが何よりも大事だと気付くようになった。

この3ヶ月間掛けて経営指針を作成したことは理事長を引き継いだ時と違う決意と覚悟を得られたように思う。今回の作成が創業者の想い、萌の歴史を引き継ぐ、「事業継承」になればと思っている。経営理念の基で会社の歴史が刻まれ、その会社に刻まれた歴史の中に原点となる不変な想いがある。萌についても同様に創業者や私達を支えてくれた人達の歴史が刻まれている。この歴史がなければ、今回の経営理念は出てこなかった。

新たな経営理念を基に私たちが関わる全ての人に、未来への道を示す灯りとなり、地域や社会に根付く礎となる実践をしていきます。

萌日記 2021.10.21~11.20

日本では治まっている新型コロナですが、世界的には増加傾向、オミクロン株も気になるこの頃です。

・岸根公園のイベント「青空マルシェ」に向けて、畑の野菜もすくすくと育っています。来春に向けてのイチゴの苗床づくりも進んでいます。青空マルシェ（11/20）については別稿で。

・11/3には、ボランティアのFさんを中心にサツマイモを収穫しました。

・戸塚区役所で萌の野菜を販売しました（11/10、/24）。

・利用者の一人は、取引関係にあるパレット会社に実習に行っています。この会社は施設外就労のカビ漂白作業などでもお世話になっています。

・非鉄でお仕事を頂いている会社から、カレンダー袋詰めの仕事を手新たに受注しました。在宅の利用者を中心に作業を進めています。

・パレットの仕事は（他に言いようがないほどに）とても忙しいです。みんなよく頑張っています。

・職員が1名、研修を経て新たに加わりました。毎日懸命にパレットを打っています。

・運送事業は間もなく開業のご報告ができる見込みです。

・今年も門松づくりの季節です。注文も着々と入り始めています。

・理事長が経営指針の策定を終え、11/16 中小企業家同友会での発表会がありました。

その後、萌の中でも発表会を行ないました。

・計画相談現任研修など、所長がいくつかの研修に参加しました。

・地域活動関係、いろいろ動きがあります。近々まとめて報告します。（岡）



戸塚区役所で野菜販売風景



休憩前にパレットの進捗を確認



小さな基板の手分解

11月20日に岸根公園で青空マルシェを開催しました

今年は、萌の畑で採れた大根、人参、京芋、レタス、さつまいも、安納芋、山東菜、キャベツ、小松菜、白菜、長ネギ、ショウガ、自家製のはちみつと味噌、利用者が飼育していたカブトムシの幼虫などを販売しました。

朝から沢山の方が買いに来て下さり、午前中でほぼ完売。売り上げは5万5千円になりました。

時間を作って来てくれた利用者や、大きい声でお客さんをお呼びして販売してくれた方、野菜を買って下さった方々、本当にありがとうございました。



いつ売っていますかというお客さんの声もありがたく頂きました。

来年もまた開催しましょうね。
参加してくれる方よろしくお祈りします。



バザー準備は当日の朝から始まります。朝 6 時からあさどり野菜の収穫をし、泥を洗って落とします。

それからパックをして、売る野菜にしていきます。この準備が大変です。今回も Fさんと Oさんが、朝早くから準備してくれました。ありがとうございました。二人の活躍あつてのバザーでした。感謝！



第 14 回経営指針発表会

11 月 26 日（金）、波多江文哉理事長作成の経営指針発表会が工房いなほで行われました。多数の職員、中小企業家同友会の方、融資を行っていただいている金融機関などの来賓の方々、病をおして会長も参加されました。

先立って 11 月 16 日（火）に神奈川中小企業センタービル内で第 14 期経営指針の発表会があり私は壇上で自らが作った経営指針を発表する理事長の言葉を拝聴し、社員の 1 人としてコメントを添えさせていただきましたが、今回は全社員と関係者含めた中で、新たな理念と理事長が指し示す我々が歩むべき方向性を皆で共有し、各々が抱負を語る事ができたことは志を共に一枚岩になって頑張っていくとする組織にとって有意義な発表会だったと感じます。

新たな理念は「隅の石と親石が共鳴しあい 人は社会の中で 私たち誰もが自分らしく生きられる寛容な社会を実現します」と定められました。

理事長が作られた理念には前理事長（現会長）の理念である”人は社会の中で”の一節が引き継がれています。この、「人は社会の中で」という言葉は前理事長の経営理念の根幹を示す言葉ではないかと私は考えています。それは障害を持つ者も、健常者とされる者も優劣なく共存し、お互いに果たせるだけの責任を果たし、平等な人間社会の一員として支え合い、心豊かな未来を共に実現することであると私は認識しており、それこそが地域社会のなかで生きていきたいと願う障害者を支援する我々が大切にせねばならない基本ではないかと考えるからです。

理事長が、「自分が何を行いたいのか、というよりも萌の歴史、活動の継続を行っていくことしか当初考えが無かった。」と仰っていました。それは、前理事長や所長、萌の草創期を支えた人々の気持ちや歴史を踏襲しながらも、その歴史を自ら先頭に立ち、前に推し進めんと歴史の系譜を継ぐ並々ならぬ覚悟がこの一文には宿っているのだと感じます。萌の 10 年の歴史は安寧としたものではありませんでした。失意のなか辞めていった多くの職員や利用者、決裂した理事の方たち。志半ばで亡くなった社員と利用者。辞めていった職員の中にはグループホーム設立の際に協賛金を提供していただいた方もいました。大卒では萌の理念に賛同して下さっていることがわかりました。そんなさまざまな心が共鳴し、時に衝突し、過ぎ去っていった過去。そんな人の念や業がいまでも萌には息づいています。

また、無学な私にはこの言葉の本当の意味がまだわかっていないのかもしれませんが、冒頭の「隅の石と親石」という言葉があります。これは家造りの捨てた石を神が隅の親石にしたということのようです。親石というのは家造りの基礎の部分である隅に置く石のこのようです。この石はキリストを意味し、その礎の上に教会が建てられたと解釈すると、イエスの理念の上に教会が立つ。我々も基盤がしっかりしているからこそ、さまざまな活動が実現せられ、継続し、歴史を前に進めていくことができるのではないかと。そんな理事長の願いがこの一文には込められているように感じました。

私が夜に工場に働いていますと、理事長と T さんが夜遅くに戸塚にある事務所からやってきます。そこで他の職員も集まり今日あったことや、各々が考えていることなどが話し合われます。

離れていても常に現場を想像し、作業を手伝い、利用者や職員を楽にしようとしてくれる実直で細やかな姿勢を見ると理事長が頑張る限りは自分もこの会社を支えていきたいと思うのです。（關）

西田幾多郎「善の研究」(岩波文庫)

「人が、舟に乗ってゆくとき、岸を見れば岸が移るように誤って感じる。素直に舟を見れば、舟が進んでいることが知られるように、身心を乱して諸々現象を理解しようと努める場合には、自分の認識作用は不変で確かなものかと誤ってしまうものだ。」(道元(正法眼蔵)。舟に乗って岸を見れば、岸が遠ざかっているように見えるが、岸から舟を見れば舟が遠ざかっているように見える。道元は、自分は確かなものであると過信し自分の立場から外界を見ていて自己中心の世界に陥ると説いた。西田幾多郎は、そのことを独我論と呼び、独我の脱出を哲学的に試みた。



西田幾多郎は1911年(明治44年)、「善の研究」を刊行する。日本で初めての本格的な哲学書である。西田はデカルトによる懐疑論を推し進めてく。疑いのまな板の上に事象をのせて分け入っていく。そしてデカルトがたどり着いた、〈われ思うゆえにわれあり〉の境地、対象を玉ねぎの皮をむいたとしてもそれを行っているのは自我でしかない。それでは独我から脱しえないと批判する。フッサールの現象学はどうか、確かにデカルトの懐疑を推し進めたが、到達したのは心理学的な知覚でしかなく、生きるための哲学ではないと退ける。〈ある〉はただあるのではない、〈ない=あらず〉があるから〈ある〉、対象を矛盾と対立の統一であると説くヘーゲルは、対象(客観)は意識(主観)の働きによって自己に現前して認識する客観—主観の図式の枠から抜け出していないという。

西田にとって哲学は生きるための哲学であった。西田は主観と客観の図式で展開する西洋哲学から独我論は超えられないと自問する。そこから〈純粹体験〉という独自の世界を導き出していく。主客未分化の事態という難解な用語。リンゴ(対象=客体)は見ている私(主体=主観)がリンゴであると解釈して私の認識となる。私の知っているリンゴは既成の知識である。既成の知識は果物としてのリンゴという一般的な常識の知識である。目の前のリンゴは果実としてのリンゴであるが、わたしのリンゴではない。では私を中心としての解釈したリンゴと既成の解釈とどう違うのか、それとここにあるリンゴとは何かと説明しなくてはならない。主客未分化の事態とは目の前のリンゴ、私が解釈しない事態というものであろうが理解が難しい。主観と客観の図式でとらえない認識の在り方としては新しい地平を開いたという意味で、西田哲学の核心をなす。

純粹体験としてのリンゴとはどんなことなのか。「リンゴがある」、果実としてのリンゴではない、目の前にあるリンゴは、主観も客観も図式化される前のリンゴである。ただあるリンゴといっても理解しづらい。「リンゴがあること」、主語と述語の一致である事態ではなく、その状態である〈リンゴがあること〉としてとらえることを中村雄一郎は提唱する(西田哲学の再構築)。〈こと〉(状態)は日本人にとってはなじみやすい言葉である。ここにあるリンゴをわたしが見ている。机の上なのか、テーブルの上で見ているのか、場所も重要になっていく。西田の問答は続いていく。(は)

福祉の話

工房いなほの利用者数の状況から、工房いなほの問題を考える～

2021年度何人の利用者が退所したか？まずこれを見よう

2020年度と比較しながら問題点を考えてみたい。

2020年	登録者数	述べ人数	2021年	登録者	述べ人数
4月	30人	553人	4月	28人	499人
5月	30人	525人	5月	27人	455人
6月	30人	560人	6月	26人	459人
7月	29人	584人	7月	25人	424人
8月	29人	500人	8月	24人	383人
9月	29人	529人	9月	21人	357人
10月	28人	559人	10月	22人	382人
11月	30人	537人			
12月	30人	561人			
1月	28人	460人			
2月	27人	460人			
3月	27人	518人			

利用者数が減っていったのは、2021年1月からだ。新規利用者が定着しなかったこともあつた。他にはどういふことが起きていたか？毎日来ていた利用者が仲間とうまくいかず辞めていく。かなり長く在籍していた利用者が他の利用者との金銭トラブルで辞めた。女性の利用者が入つたことで、異性関係の問題が起きていく。その結果1名の利用者が退所せざるを得なかつた。

出勤数がかつとも少なく、以前ならリハビリ就労と言われているだろう利用者は、出勤数が減り、来なくなっていく。結婚を支援していた利用者が結婚を機に双方利用日数が減り、辞めていった。就職で工房いなほを卒業した人2名(これはうれしいことである。)1名が就労移行に移るため退所。といろいろなことがあつた。

12月に相談支援事業所 心かやが、指定一般を取り、相談事業所を戸塚駅前に移した。相談支援事業所にはベテラン職員たちが移動になつて組織が二つに分かれていく。これを境に利用者が減少していく。精神障害者を対象に以前はリハビリ就労をやつていた。これは会長の担当だったが、会長も計画相談員であり、農業と二つで手いっぱいになる。そして辞めていった利用者には精神障害者の方が多いように思う。

工房いなほは就労の場である。リハビリ就労を経ながら、時間と日にちを伸ばしていく…この作業には、精神障害者が多いので、精神障害への理解と学習が必要であるが、これは会長が担つてきたポジションである。そこが空洞になつていった。

利用者数の減少に関してはその原因について、職員一人一人が考えなければいけないだろう。10月ころから一人の利用者が職員への不満を爆発させていた。それを契機に、会長が2度にわたって、望まれる職員像ということで通信に書いている。それを読み、日々生かそうとしてきたか、利用者が職員に何を求めているのかは真摯に受け止めていかなくてはならないだろう。

支援者の基本姿勢として、職員には自己覚地能力が必須である。自己覚知とは、自分を知ること、過信することなく、うまくいかないときは自分自身を振り返ること(計画相談現認研修より)が大切であるとある。職員に必要なあり方として「自らの領域、限界も説明できる。独善的にならない、全体的な視点を持つこと、専門職として、知識を生涯、得続ける姿勢、学問体系から学ぶ、この両輪が必要である、」(計画相談現任研修テキストより)。これはとても大切である。自分の支援の在り方はこうだ、それで終わらず、それを振り返られる、知識と土量が必要ということだ。辞めていった利用者の心の内をのぞいてみる必要があると思う。これから利用する人たちのためにも。

今言えることは、各班での作業提供の在り方を問い直す必要があるだろう。ニーズありきの支援が必要であると考えたときに、利用者たちはどういうニーズをもってここに通ってきているのか？個々のニーズに答えていく作業提供を考えなくてはならないと思う。

パレット班は工賃を稼ぐ、工房いなほを自分の職場と考えている利用者が多い。就労を希望している若い利用者も入っている。所属意識とやりがいがあるところである。毎日来るのは当たり前の人たちで構成されている。これはたぶんA型から引き継がれてきたものだろう。

では、非鉄金属班や農業、みなとみらいなどの清掃はどう位置づけるのか？パレット班と目的は一色淡にはできないだろう。ここに属している利用者たちのニーズを考える作業提供の仕方を考えなくてはならないだろう。

会長と私の時代は仕事事態がなく、今日は何を仕事として提供していくか日々考え悩んでいた。その時代、皮肉にも利用者は定着率が良かった。今は仕事はあふれるほどある。仕事恰到好处にある今なのに、利用者の定着率が下がっているのはなぜだろう？仕事ですでにある・・・すでにある仕事をどう利用者に提供し、所属意識と役割意識、そして、仕事場の主人公は自分たちであるという、利用者にとって「楽しい仕事場」を作り出す努力は怠ってはいけない。

そして忘れてはいけないのは、仕事をしている向こうには、彼らの生活があるということだ。この生活しているという視点を大切にしていかななくてはならないと思う。

収益事業が安定し、12月から配送事業所が始まる。今こそ福祉の力が問われている。収益と福祉。収益が充実しつつある今、その片輪である福祉を充実させていく必要がある。

*障害のある方から見た世界を想像してみる。利用者の表情をみってみる。声を拾う。
何より大切なのは支援者である自分を、振り返られる謙虚さを持ちたいと思う。見ていくという視点の在り方にこだわりたい* (波多江久美子)

新しい経営理念

理事長が中小企業同友会の第14期を受講して新しい経営理念を作成した。会長は第3期を受講して理念を作成している。

「鳥は空へ 魚は水へ 人は社会の中に 私たちは共に自分らしく生き
こころ豊かなる未来を実現します」これが作成されたのは2011年である。それから
ずっと10年間経営理念であり続けた。

*****新たな理念は*****

「隅の石と親石が共鳴しあい
人は社会の中で
私たち誰もが自分らしく生きられる寛容な社会を実現します」

☆多社風☆多

- ①皆で互いに協力しよう
- ②相手の気持ちを想像しよう
- ③感謝の気持ちであいさつしよう
- ④一人一人が成長していくのを見守ろう
- ⑤喜びを分かち合おう



2021年11月16日

編集後記

新しい経営理念を理事長自身が作成してほしいというのは、会長が現理事長に経営をバトンタッチしてからの念願であった。ようやく厳しい講義や討論を踏まえて、新たな経営理念が産声を上げた。これからはこの理念を理解して社員・利用者一丸となって萌を発展させてもらいたい。

寛容な社会の実現は難しい。現実はまだまだ障害者にとって厳しいものがある。障害を理解することができる社会とは、自然に生まれるものではない。自分たちが自分たちの手で作り上げていく社会である。「寛容」この言葉の意味するものを、そして「隅の石と親石が共鳴」するとはどういうことを意味していくのか。各自が自分の心で考えて実践して欲しい。

(所長)